

福祉のひろば 11

2019

特集

第25回社会福祉研究交流集会in東京

つなぐ・つながる～現代の貧困に立ち向かう～



住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

http://www.kyoto-archi.co.jp/

〒601-8382

京都市南区吉祥院石原上川原町21

http://www.creates-k.co.jp

クリエイツかもかわ



TEL 075 (661) 5741

FAX 075 (693) 6605

送料何冊でも240円

実践とこれからの救護施設の役割と課題を考へる。



救護施設からの風

「健康で文化的な
最低限度の生活」施設
X ゆたかな暮らし……

加美嘉史・松木宏史 監修
大阪福祉事業財団高槻温心寮 編著
A5判230頁 2200円+税

無料低額診療事業の意義や役割、
実績、現場の実践をまとめた「決定版！」
貧困格差が広がる中で、医療が受けられない人にとって、強
い味方の「無料低額診療事業」。医療費の窓口負担を免除、減
額のみならず、当事者に寄り添い生活問題を共に解決する
「ソーシャルワーカーの支援付き福祉医療制度」



無料低額診療事業の すべて 役割・実践・実務

吉永純・原昌平・奥村晴彦
近畿無料低額診療事業研究会 編著
A5判280頁 2600円+税

“ほんとうの”住民自治 地域福祉をめざして

—東京都港区のとりくみ—



今年の夏は、東京・明治学院大学において第25回社会福祉研究交流集会を開催しました。実行委員長が明治学院大学名誉教授・総合社会福祉研究所理事の河合克義さんだったこともあり、東京都港区等で福祉活動をされている方が、たくさん参加してくださいました。

港区では、ひとり暮らし高齢者等見守り推進事業として、ふれあい相談員が高齢者の訪問活動、見守り活動をしています。



港区ふれあい相談員の特徴は、ひとり暮らしおよび複数の75歳以上の高齢者のみで構成する世帯のうち、「介護保険や区の高齢者サービス等を利用していない方」を対象に、アウトリーチでの訪問活動をしていることです。つまり、介護保険をはじめ、福祉サービスではカバーできていない地域の高齢者の実態把握と支援をおこなっています。

訪問をすると、本当は困りごとやニーズを抱えていても、「相談先がわからなかった」「たよりたくない」などの理由で福祉サービスを利用されていない方に出会うことも多く、活動の大切さが見えてきます(港区ふれあい相談員の活動については、特集・シンポジウムで紹介しています)。



港区では、高齢者の地域デビュー・地域との接点づくりの手助けをすることで地域の課題解決をめざそうと、2007年から明治学院大学と共同してチャレンジコミュニティ大学を運営しています。その第1期修了生が、学んだことを地域に還元しようとチャレンジコミュニティ・クラブ（CCクラブ）を創設しました。

コミュニティ・カフェ高輪（写真上）は、2013年に開設した地域交流の場で、現在3か所に拡大し、地域交流や居場所づくり活動をおこなっています。また、他の地域では、公園での花壇づくりなど、環境美化緑化やボランティア活動もおこなっています（写真下）。



子育て支援活動も多岐にわたります。写真のプレーパーク活動支援は、CCクラブの10期生がプレーパーク運営母体の「みなと外遊びの会」を支援したことからはじまりました。子どもたちが安全に、楽しく遊べるように、CCクラブの会員も運営や当日の準備、見守りにかかわっています。

チャレンジコミュニティ大学を修了すると、自動的にCCクラブの会員になります。2018年時点で会員は592名におよび、実態調査（回答率約57%）の結果では、そのうち、個別に活動を主催したり、地域のグループに参加して活動している会員は185名で、グループ数は297です（CCクラブの実践は、特集・分科会3で報告していただきました）。（写真 提供、文 申 佳弥）

●特集● 第25回社会福祉研究交流集会 in 東京

つなぐ・つながる～現代の貧困に立ち向かう～ 10

【PHOTO】写真でみる 第25回研究交流集会 12

少女たちの目線で、生きる希望やいのちを支える 桑原 一章 16

【シンポジウム】

寄り添いつながるふれあい相談員～高齢者支援の現場から～

松田 綾子 22

子どもの虐待～発見からケアへ～

川松 亮 24

地域で生きる障害者

新井たかね 26

つながり、力を合わせ、すべての人の生きる権利の保障を

上西 克明 28

福祉労働の専門性と福祉労働者の権利

小園 麻美 30

福祉市場化と社会福祉法人の役割

田中 昭博 32

「地域共生社会」と住民自治

中島 素美 34

障害者が地域で生きるために

野村 伸一 36

子ども・家族への支援を考える

大塚 翔太 38

公的責任の後退と自己責任論へ

岩尾 亮太 40

一人ひとりが学び、考え、真実を見抜く目を

吉永みゆき 42

参加者の感想 44

●トピックス●

家族依存からの脱却が急務——障害児者家族の健康実態調査から

塩見 洋介 46

津久井やまゆり園事件から三年経過して

松尾 悦行 52

塗りかえられている戦争の記録と記憶（その1） 塩見 一弥 58

●連載●

阿修羅がゆく

わたしが好きな釜ヶ崎（4）

水野阿修羅 62

相談室の窓から

M子さんの“心のしんどさ”（1）

青木 道忠 64

育つ風景 トントンの旅が教えてくれたこと

清水 玲子 66

ひととしてあたりまえに生きたい

きびしい大阪ろうあ会館の運営

清田 廣 68

映画案内

『ゴッホとヘレーネの森 クレラー・ミュラー美術館の至宝』

吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

全国で増えゆく「無縁遺骨」

生田 武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

笑顔は大切じゃ～！

ラッキー植松 74

ホームレスから日本をみれば

ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ

川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子

—『福祉のひろば』発刊40周年企画 その2—

「子どもは社会の宝」と 言える社会に

社会福祉法人六踏園 第二調布学園 園長 石井義久さん

この間、子どもの虐待死事件の報道など、悲しく、痛ましい事件がづづいていきます。また、全国での児童虐待相談対応件数も一六万件に近く、毎年、過去最高を更新しつづけています。こうした報道を見るたびに、「子どもは社会の宝」といった言葉と思想は、いったいどこにいつてしまったのだろう、と思わざるを得ません。

実際、近年児童養護施設には虐待を理由とする施設入所が急増しています。いま私が働く施設においても、虐待が理由の入所が八割となっています。「昔は情が通じたが、今は情がなかなか通じない」。これが虐待を受けた子どもと生活を共にするなかでの実感です。ふだんは子どもらしく愛くるしい仕草をしつつも、なにか気に入らないことや、思いが満たされないと、見境なく暴力行為になってしまいます。「袖触れ合は喧嘩の仲」といつても過言ではありません。いまや、虐待を受けた子どもたちの課題への対応は、福祉・教育・医療・司法の四領域にもまたがるほどの深刻さを増しています。「虐待は、砂の上にできた足跡ではなく、コンクリートの上でできた足跡である」と言った精神科医の言葉が思い出されます。それだけ虐待を受けた子どもらの心の傷は大きく、深くなっているのを実感しています。

施設の子どもの見て思うのは、施設の子は大人社会の被害者であるということです。子ども



40周年企画として、総合社会福祉研究所設立初期の会員さんに、この間の活動や社会福祉への思いをリレーで語っていただきます。

いしい よしひさ

1973年大学卒。児童養護施設に3年勤務した後、当時の日本社会福祉労働組合東京支部（現全国福祉保育労東京地本）に専従職員として12年勤務。その後元の児童養護施設に再就職し、2015年、第二調布学園園長に就任。

たちは「何でぼくはここにいるの?」「どうして家族と離ればなれにならないといけないの?」「と大人社会に身を挺して問いかけていると思われます。そして身をもって、貧困が連鎖する社会ではなく、「希望が連鎖する社会の大切さを」と大人に教えてくれていると思ひます。

子どもは何も選ぶことができずに生まれてくることを考えると、貧困が連鎖する格差社会ではなく、少なくとも「子ども時代は公平な社会」を生まれてくる子どもたちのために用意することは、大人の責任ではないでしょうか。子どもたちのもつ無限の才能と可能性を導き出せる社会。それでこそ、大人も胸を張って「子どもは社会の宝」と言えると思ひます。

また、虐待は絶対あつてはならないことですが、ややもすると、子どもと親が対立構図にみられてしまうことがあります。対立ではなく、「子どもと親」、とくに母親もふくめた家族福祉的な諸政策・制度の確立、充実が早急に求められていると感じています。

福祉制度の拡充に向けて現場に求められるのは、先代園長の教えでもある「日々実践、日々研究、日々運動」の「三つの日々」です。『福祉のひろば』は、この実践、研究、運動を大きな柱に創刊以来四〇年間に貫して現場の声を大事にし、それを束ねて運動へと発展させてきてくれています。四〇年の歩みに感謝するとともに、さらなる発展を期待します。

希望

九月下旬、ニューヨークの国連本部で、国連気候行動サミットがおこなわれた。そこでの二つのできごとを、日本国民として押さえておかなければ、と記憶にしている。

一つは、スウェーデンからヨットで渡ってきた一六歳の環境運動家グレタ・トゥーンベリの演説だ。

「私はここにいるべきではありません。私は海の反対側で、学校に通っているべきなのです。あなたたちは、私たち若者に希望を見出そうと集まっています。よくそんなことが言えますね。あなたたちは、その空虚な言葉で、私の夢、そして、子ども時代を奪いました。それでも私はラッキーな一人かもしれない。人々は苦しみ、人々は死んでいます。すべての生態系が破壊されています。私たちは、いま大量絶滅のはじまりにいるのです。それでも、あなたたちが話していることは、お金のことやいつまでも経済的發展が続くというおとぎ話ばかりです。よくそんなことが言えますね。この場所に来て、『十分にやってきた』とどうして言えるのでしょうか。必要な政策や解決策はどこにも見あたらないのに」と、三〇年間の科学的証明を紹介しながら、今の対応のリスクを次世代に負わせようとしているなどのメッセージがつづく。そして、「あなたたちは、私たちを裏切り、その裏切りに私たちは気づきはじめています」と語った。

もう一つは、このグレタさんと対比したい小泉進次郎環境大臣だ。「気候変動問題はセクシーだ」という発言や行動。小泉大臣がニューヨークでステーキを食べたことは、さまざまところで批判の対象になっている。当の本人は、その真意さえも把握していないようだ。たとえば、牛肉一キロあたりの消費は、車で一〇〇キロ走行するのと同量の温室効果ガスが排出される。進次郎氏の発言は、文字にすると本当に中身がない。中身がないのは、文字にしたからではなく、そもそもの問題だからだと思える。

世界では、一〇代の若者たちが、平和や人権、環境の問題だけでなく、さまざまな社会問題、生活問題に関心を寄せ、仲間をひろげ、行動している。私はよく講演などで、「主体的能動的な教育」の政策や実態について伝えていく。バートランド・ラッセルやウィリアム・ジェームズなどを紹介しながら。これらの問題は、もちろん、福祉現場にも押し寄せている。教育で受動的従属的な国民養成をし、資本や権力の都合のいい労働力確保を進める国家とつねに向き合わざるを得ないからだ。この時代のなかで、自らを律して、この課題に、問題に向き合うことは甘くはない。

さて、今号の特集では、第二五回社会福祉研究交流会を取り上げている。記念講演の仁藤夢乃さんには、本誌二〇一四年八月号の「ひろばトーク」にも登場いただいているが、より詳細に直接聞ける場となった。日本でも、主体的に能動的に、社会問題・生活問題に向き合っている若者は少なくない。それは、日本にとっての希望である。

一五年間編集主幹の任を担ってきたが、この度、退任させていただけることになった。読者のみなさんから教えていただいたことは、雑誌にも、そして私にとっても宝である。感謝申し上げます。

(編集主幹 黒田孝彦)